



⑭石板（せきばん）

縦：110 cm、横：166 cm、厚：10 cm、石質：緑泥石片岩

この石板は、昭和 50 年（1975）3 月、市内石原地内の市道 1377 号線の工事の際に、東武熊谷線の土手（秩父道志るべ付近）に放置されていたものを撤去したもので、それ以前は、小川の石橋として利用されていました。一部に加工された痕跡があることから、石原古墳群の古墳石室の天井石の可能性があり、保存のため同年 5 月 24 日に園内に搬入し、庭石として保存しました。

上右写真は、昭和 50 年 3 月 8 日に、現地での調査の様子を撮影したものです。



⑮供養塔（くようとう）

高：201 cm、幅 75 cm、石質：安山岩、造立年：元文 5 年（1740）

施主は、梅澤又右衛門・梅澤勘右衛門塔身の四面には梵字が彫られています。

西面：タラク（虚空蔵菩薩）・南面ウン（阿閼如来：あしゅくるに）・東面：アク（不空成就如来）

・北面：キリーク（阿弥陀如来）。



⑯紫石句碑（しせきくひ）

高：120 cm、幅：140 cm、造立年：昭和 34 年（1959）5 月

斎藤紫石講演会により建てられた斎藤紫石自筆の句碑。

「老いらくの 苔に花咲く 心地かな」 紫石が晩年の心境を詠んだ美意識溢れる句。

上右の写真は、句碑の脇に立つ斎藤紫石。昭和 35 年 9 月 18 日撮影。

斎藤紫石（1885-1964）：熊谷市鎌倉町生まれ。本名茂八。大正 10 年（1921）熊谷町長に当選して以降、県議会議員を歴任し、昭和 14 年（1939）新市政の熊谷市長となる。俳句に親しみ、紫石と号し、俳誌「鮎」を刊行する。政界引退後は、市内石原に「紫石巢」と称する寓居を構え、独自の俳句を探求するため幽居生活を送りました。



加藤清正が豊臣秀吉に献上し、その後忍城主の松平忠吉が譲り受けたとされ、明治 4 年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

元は一つの石でしたが、忍城へ運ぶ際、5 つに割れてしまったと言われており、他の 2 つの天柱石も、庭園内に配置されています。



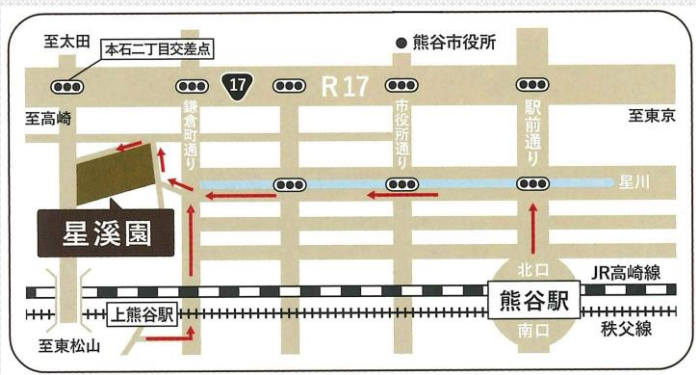
⑰十王供養塔

高：106 cm、幅 51 cm、石質：安山岩、造立年：近世

十王とは、道教や仏教で、地獄において死者の罪状の審判を行う判官 10 尊の総称。泰広王、初江王、宋亭王、五官王、閻魔王、變成王、太山王、

平等王、都市王、五導輪王の十神を指す。亡者は、初七日に泰広王の庁舎で裁判を受けるのに始まり、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、百か日、一周忌、三回忌の十回まで次々に各王の庁舎で罪の軽重を判定され、次の世の処世を定められるといわれています。

生前に十王に対して供養を行った者は、死後十王の裁判を受けるとき、業報を軽くすることができると言われており、この思想が近世庶民の信仰を受けるに至ったと考えられています。



発行：熊谷市立江南文化財センター

電話：0 4 8 - 5 3 6 - 5 0 6 2



星溪園の石造物

星溪園は、近代の熊谷市の発展に大きな功績を残した竹井澹如（1839-1912）によって、明治の初めに造られました。

星溪寮・松風庵・積翠閣の 3 つの建物と庭園で構成されており、庭園には、名石・古塔が配置され、池泉回遊式庭園となっています。

竹井澹如が集めて配置した園内の石造物について解説します。



熊谷市指定文化財 記念物

名勝 星溪園

〒360-0046 埼玉県熊谷市鎌倉町 32 番地

TEL 048-522-9389



再建碑：令和 5 年造立

①星溪園記碑（せいけいえんきひ）

新碑：高：100 cm・幅 110 cm、旧碑：高 105 cm・幅 147 cm

星溪園の由来が記された碑。撰文は、竹井耕一郎、書は酒井天外（1875-1942）。

竹井澹如（1839-1912）が池を整備し樹木を植え庭石を配し、茶室を設けたことが記されています。

刻まれている漢詩は、小野湖山が、明治 12 年（1879）7 月に星溪園を訪れた際に詠んだものです。

竹井耕一郎（1868-1945）：法学者、文人。竹井澹如の長男で、星溪と号しました。漢籍の造詣深く、詩文に優れていました。昭和 5 年（1930）には、積翠閣を新築し、熊谷を文化的な活動拠点としました。



②五輪塔（ごりんとう）

高：51.5 cm、幅：20 cm、石質：安山岩、造立年：中世

五輪塔の空風輪・火輪・地輪で構成され、水輪を欠いています。

地輪には 4 面に梵字（ア・アー・アン・アク）が刻まれています。

五輪塔は、密教において創始された塔で、上から宝珠形の空輪、半球形の風輪、宝形造の火輪、球形の水輪、方形の地輪で構成されます。



③天柱石（てんちゅうせき）

長：214 cm、幅 19 cm

現在「天柱石」と呼ばれていますが、かつては「筭石（こうがいせき）」と呼ばれていました。

文禄の役（1592-1533）に際し、加藤清正が朝鮮から、「袖振り石」とともに持ち帰ったと伝えられる石です。

加藤清正が豊臣秀吉に献上し、その後忍城主の松平忠吉が譲り受けたとされ、明治 4 年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

元は一つの石でしたが、忍城へ運ぶ際、5 つに割れてしまったと言われており、他の 3 つの天柱石も、庭園内に配置されています。



せいけいえんちょうかんず 星溪園鳥瞰図



⑧青邨句碑 (せいそんくひ)

高：102 cm、幅：91 cm、石質：安山岩、造立年：昭和 57 年（1982）10 月

夏草埼玉県支部により造立された山口青邨自筆の句

碑。

「夕紅葉 鯉ハ浮くまゝ 人去りぬ 青邨」

この句は、青邨（せいそん）が、昭和 25 年（1950）11 月に星溪園を訪れた際に詠んだもので、玉の池の水面に映る夕紅葉と行き交う鯉の様子を情感込めて表現しています。

山口青邨（1892-1988）：俳人、鉱山学者。盛岡市生まれ。鉱山学で東京大学教授となり、昭和 22 年に水原秋桜子らと東大俳句会を興し、俳誌「夏草」を主宰しました。また、高浜虚子の指導を受けて「ホトトギス」の代表的俳人として活躍しました。



⑨宝篋印塔

（ほうきょういんとう）

高：76 cm、幅：35 cm。石質：安山岩、造立年：中世

近世の宝珠を上に載せています。

宝篋印塔の笠・基礎・反花座が残存し、塔身を欠きます。

宝篋印塔は、飛鳥時代には宝篋印陀羅尼を収めた経塔で、これを礼拝することで罪障が消滅し、苦を逃れ、長寿を得ると信仰されました。その後、中近世になると墓塔・供養塔として用いられるようになりました。



⑩五輪塔（ごりんとう）

高：55 cm、幅：45 cm、石質：安山岩、造立年：中世

五輪塔の空風輪と地輪のみ残存し、火輪・水輪は失われています。空風輪は、近

世のものを組み合わせています。

五輪塔は、密教において創始された塔で、上から宝珠形の空輪、半球形の風輪、宝形造の火輪、球形の水輪、方形の地輪で構成されます。五輪塔の脇には、安山岩製の石臼（近世）の下臼が置かれています。

竹井澹如（たけいたんじょ：1839-1912）：政治家・文人

慶応元年（1865）熊谷宿本陣の竹井家を継ぎ、当主となりました。大隈重信・渋沢栄一と親交があり、熊谷県誕生に尽力しました。初代県会議長をつとめ、産業土木面でも大きな功績を残しました。

また、俳人として「幽谷（ゆうこく）」と号し、内海良大（りょうたい）を熊谷に招聘し、俳句の研究結社をつくりました。



④袖振り石（そでふりいし）

高：92 cm、幅：56 cm

現在「袖振り石」と呼ばれていますが、かつては「誰ヶ袖手水鉢（だれがそでちょうずばち）」と呼ばれていました。

文禄の役（1592-1593）に際

し、加藤清正が朝鮮から「天柱石」とともに持ち帰ったと伝えられる石です。加藤清正が豊臣秀吉に献上し、その後忍城主の松平忠吉が譲り受けたとされ、明治 4 年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

⑤十王供養塔

（じゅうおうくようとう）

高：69 cm、幅：45 cm、石質：安山岩、造立年：寛文 2 年（1662）12 月

北面に「寛文二年十二月」

「三界六道■■■皆是成仏 ■■■衆生■■■」と彫られています。東面には、死後 47 日目に裁く五官王（普賢菩薩）が、生前に犯した人間の罪の重さを秤で量っている様子が刻まれています。



⑥宝篋印塔

（ほうきょういんとう）

高 49.5 cm、幅 25.5 cm。石質：安山岩、造立年：中世

上端の宝珠は近世のもの。笠の下に基礎と反花座がきており、塔身を欠いています。

宝篋印塔は、飛鳥時代には宝篋印陀羅尼を収めた経塔で、これを礼拝することで罪障が消滅し、苦を逃れ、長寿を得ると信仰されました。その後、中近世になると墓塔・供養塔として用いられるようになりました。



⑦石門（せきもん）

高：190 cm、幅：120 cm。石質：珪化木（けいかぼく）

珪化木は、中生代や新生代に地中に埋没した樹木の幹や根などが、地層からかかる圧力によってケイ酸分の多い地下水などが染

み込み、長期間の作用により樹木が酸化ケイ素（シリカ）に変化することによって、材質が石化した樹木のことです。



⑪供養塔（くようとう）

高：88.5 cm、幅：38 cm、石質：凝灰岩（基礎は安山岩）、造立年：中世

本来は、別々に建てられていた五輪塔（空風輪・

火輪）と宝篋印塔（基礎）の部材を組み合わせたものです。

空輪部と風輪部には 4 字ずつ梵字が刻まれています。基礎部の格狭間（こうざま）には、東面に「正月」「八日」、西面に「応永」「十未癸」と刻まれています。



⑫ 芭蕉句碑

（ばしょうくひ）

高：92 cm、幅：70 cm、造立年：寛政 8 年（1796）

「春もやや 色気とのふ 月と梅」

芭蕉 50 歳の句。句の意は「厳しい冬が過ぎ、徐々に春めいてくる早春の情趣を、月と梅の取り合わせで描き出している」画讀句として芭蕉が好んだ句です。

碑裏には、「太蕪（たいぶ）」「秋瓜（しゅうか）」の句と、天明から寛政期にかけて活躍した熊谷の俳人「官鮎（かんあゆ）」「笑牛（しょうぎゅう）」「雪叩（せっこう）」の名が刻まれており、江戸時代中期に、江戸に居住した俳人と熊谷の俳人の交流がうかがえる碑となっています。

太蕪（■-1774）：古川太蕪。江戸時代中期の俳人。

秋瓜（■-1790）：多少庵秋瓜。江戸時代中期の俳人。

官鮎（江戸時代後期）：竹井新右衛門。江戸後期の熊谷宿の役人。

笑牛（1728-1796）：須賀市左衛門長栄。建部涼袋門下の俳人、商人。

雪叩（1732-1799）：野口雪江。書家。寛政の三名筆の一人。



⑬ 鹿兒島寿蔵句碑

（かごしまじゅぞうくひ）

高：100 cm、幅：80 cm、厚：12 cm、造立年：平成 31 年（2019）3 月

鹿兒島寿蔵熊谷草歌碑

建立呼びかけ人一同により造立された、鹿兒島寿蔵（1898-1982）自筆の歌碑。

「熊谷草 なくてかなはじと 星池に 植ゑて福布くしき 花を咲かしむ」

歌の意味は、「熊谷草がなくてはならないと星溪園に熊谷草を植えてふくよかな花を咲かせている」です。

昭和 55 年（1980）5 月に、地元の歌人棚澤慶治らの働きかけで、星溪園を訪れた際に詠んだ歌です。